

島 さち子

小 食

何時も蒲団をかぶって寝ているおばあさんがいた。どうしてこんな暑い日に厚い冬布団をかけているの、と聞くと、からだがフワフワ浮き上がって風に吹かれて、飛んでしまいそうだから、と答えた。お医者さんはなんておっしゃるの、と聞くと、栄養失調だよ、おばあさん！って。(栄養過剰で肥満児が問題になっているというのに) だってねえ、若い者がこの家においてくれるのでさえ、ありがたいのに、何を食べろ、牛乳を飲めっていわれたってー。その代わりに水を3升飲むよ、色がついているか、いないかの違いだもの。もったいない。小食で若夫婦の負担を軽くしている。これがこのおばあさんの唯一の自慢なのだ。家族が困りきっているのに、フワフワ体が浮くだなんて、笑えない笑い話である。

都心のツクシ

三年ほど前、皇居のお堀（警視庁から半蔵門）の斜面で、菜の花、フキ、スマレに混じって一面にはえているツクシを見つけた。15センチくらいに伸び揃った、おびただしいツクシ、ツクシ。故郷の町でさえ捜しても見つからなかったのに、都心でこれを見つけたときは、我目を疑ったものだ。ショルダーバッグに押し込んだ。ともすると、汚れていて食べられないのではと、思ってもみたが、まあ平均的日本人は皇居に向かってオシッコをするなんてことはあるまいという、いささか古めかしい理屈に安心し、おひたしにして食べた。都心はスモッグの空の下、野草も虫も見ることができないと思っていたけれど、お堀端には、自然が宝物のように残っている。あれから毎年同じ場所でツクシをとる。今年は時期が遅すぎてやや干からびてはいたけど……。

お風呂に出前

あわて者は、お風呂に飛び込んだら下は水ということがしょっちゅうである。夏と違い、秋ともなるとヒューヒューの叫び声。「熱いお紅茶持って来てえー」風邪でもひかれたら面倒だから、大急ぎで持っていくと、お風呂のフタをして首だけ出している。「なんかお菓子なかったあ！」キャンデーのきれいな包み紙のものを持って行こうものなら、お風呂の暖まってくるまでの間に、オリガミの舟を水面いっぱい浮かべ、小人国のガリバーみたいに舟を転覆させて喜んでいる。あとから入るものは全く閉口する。

夏の暑いとき、「一丁たのむ」とお風呂に入って、冷たい飲み物を運ばせるのも悪くはない。何時かやって見ようと思いつきながらまだ果たさないでいる。

三人姉妹

母とお手伝いさんが留守なので、幼い三人姉妹がお昼をつくろうと、台所でダイコンやキュウリをメッタ切りにしていた。帰ってきたお手伝いさんがびっくりして、三人をしかりつけた。一番上の女の子は気が強くて「悪い子だなんていうんなら、出て行きなさい。いますぐ、出て行きなさい」とどなった。二番目の女の子は少し考えて「お昼を食べてからにしたら」と言った。三番目の子はワアワア大声で泣き出して「出て行っちゃいや」と追いかけて、追い出されたお手伝いさんの家で、お昼をご馳走になり、気をよくしているお手伝いさんにオモチャまで買ってもらった。二人の姉はお昼を食べることができなかった。三人娘の性格がよく出ているでしょう。母の好きだった我が家の昔話である。

ギンナン

上野の寛永寺から動物園にかけて、銀杏（いちょう）の木が多い。秋の紅葉は豊かだ。しかし実が落ちるかどうかわからない、気にしたことは一度もなかった。去年の晩秋、ときどき雨の降る日、動物園に入ったところで下に落ちているオレンジ色の実にギンナンが内臓されていることをたしかめた。猛獣のオリは工事中で、人影もまばら、つまらなかったから、雨がさをさかさにしてギンナンを拾い集めた。ラクダのオリの中に敷くように落ちている実を横目で見、それでも百個くらい拾って、気づいてみたら猛烈な悪臭。電車のなか厚顔にも知らん顔をして家まで持ち帰った。皮をはぎ、水洗いして外に干したが、翌朝、予想もしないことが起きた。手や顔にブツブツがいっぱいできて、はれあがっていたのだ。

活け花

一週に一度、花屋さんからお花がとどく。春夏秋冬、いつもあるのが、菊とカーネーション。秋になると、心もち菊の花が大きくなったような気がする。しかし花の生け方も、水かえもいかげんだから、花たちは実に残酷な一生を終わることになる。

ある日、夕食にとりかかったら、野菜を買い忘れていた。そのとき頭に浮かんだのが菊の花のオヒタシと菊の葉のテンプラ。昔、秋ともなれば母は菊のオヒタシや白和えを作ってくれたものだ。あの香りをもう一度。大輪の菊の花をつみとり、ゆでて水洗いをした、やっぱり懐かしいあの香り！！ 味をしめた近頃では花が届くたびに、「まあ、おいしそうなお花」とか言って、私という人物を見直させ、みんなを恐ろしいと震え上がらせている。

食事儀式

さっきまで椅子から飛び降りたり、這い登ったりして遊んでいた男の子が、お昼の食事時になったら、急に元気がなくなり、ぐったり横になってしまった。体の具合が悪くなったのかと驚くと、男の子のママである友人は、違うという。何時も食事になると横になり、一サジーサジ、ママが口にはこぶ、それをまずそうに食べる。これが日課だ。黒く痩せてはいるが、三歳で一年生くらいはありそうな背丈なのに、一口も自分で食べることができないのだそうだ。一人で食事を始めた頃、テーブルや手や顔をあまり汚すので、ママがついサジをとって食べさせてしまうことを繰り返しているうちにそうなったらしい。この子に報復されているのよ、しかたがない、わたしが悪かったのだから……。彼女はいう。

ブランデー

「このコーヒーのなかに何が入っているかわかる？」と言われて舌の面積を大きく広げ、舌尖、真ん中、つけね、変わった味をとらえようと、長い間、口に含んでいたがわからない。「鈍感ねえ、お父さんの形見のブランデーをいれたのに」

父が亡くなる最後の日、二三日ぶりで床から出て、畳のうえに座り、ゆっくり新聞を広げ、タバコを一服吸って、庭を眺め、それからブランデーをちびりちびり飲んでた。早くベッドに戻るように急かすと、まあまあ、そう急ぐこともあるまい、と言ってゆったりとしていた。父が死の床に入る直前まで飲んでたブランデーを大切に、一年に一度かすかに匂いを嗅ぐほど飲んで、満足している。

丸呑み

この夏、何回も食べ物を丸呑みにして、咽につかえそうになったが、幸いそれは飲み物に浮かべた氷であったから、自然にとけて胃袋に落ち込んでしまった。あの首の太さから考えてみれば、とても信じられないことである。牛がカブを丸呑みにして死んだという話。窒息死したのですか？ つかえたけど、窒息ではない。つかえたのなら、棒で突っ込むとか、つまみだすとか、できなかったのですか。しました。牛の胃袋は四つに分かれているほど複雑ですから、内容物が異常発酵してガスが体のなかに充満したんです。牛はいつもモグモグかみすぎるほどかんでいるみたいなのに、後からかむことにしようと丸呑みにもするらしい。わたしの首は牛にくらべたら細いのがから、気をつけなければ……。

ツツジのミツ

東北の山を歩いたとき、山水画にあるような深い谷が、いくつも入り組んでいるところにでた。春で、茶色い岩肌を谷に落とし、山腹では緑が萌えあがっていた。ふと、足もとのガケを見降ろすと、ピンク、うす紫、赤、白などのツツジがいっぱい咲き誇って、まるで夢幻郷だ。少し降りて一枝でも、と思ったが、下の深い谷が目にはいり、足の裏のあたりが、ひとりでにヒクヒク動き出して、勇気が出ない。わたしがすくんでいると、山の子供たちが来て、木の枝を交互につかんで巧みにするすると降りていき、手に手にツツジの枝を折って帰ってきた。彼らは花をつまみでは、チュッとミツをなめ、花びらを地面にはき捨てて踏みにじる。多少の残酷さには目をつむり、私も枝をもらって、花の根元のミツをそつとなめてみた。すこし青臭いけれど、あまいことだけはたしかだ。

(テーマ 食 10日間連載)